郷土室だより

第31号

昭和56年3月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1.

電話 543－9025

切絵図考証 一八

安藤菊二

補遺一 桃井道場

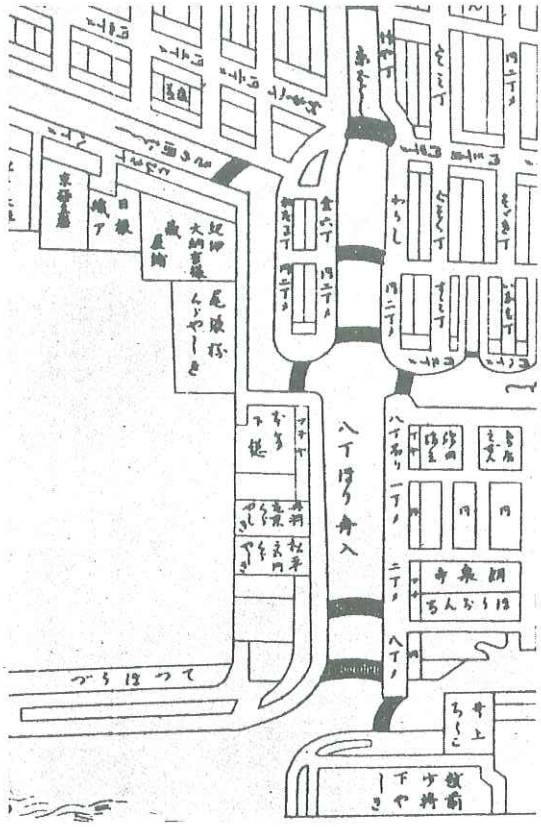
前々号に、あさり河岸の桃井道場のととを書いたあとで、机辺雑陳の書冊の間から、忘れていた古い新聞の切抜きを見出した。

昭和四一年春から『東京新聞』に連載された「幕末の東京」その四四回に、「桃井道場」の記事が載っていた。無署名ながら、丹念に調査をし、必要な個所は子孫を尋ねて聞書をとっており、信用してよいと思われる。よって、少し長いけれども、ここに転載させて頂き、忽忘に備えておきたい。記事は、

塾頭に武市半平太
千葉・斎藤と並ぶ名門

という大見出しで、こう書いてある。

○：幕末の三剣士ということばがある。技の千葉、力の斎藤、位の桃井というが、子母沢寛氏はこれを講釈師の張り扇からたたき出されたもので、「清水港は鬼よりこわい。大政・小政の声がする」と同じ類だというのだ。強い弱いは別にして、この三つの道場がたいへん流行したことは事実のようだ。まず桃井道場は、開祖の桃井八郎左衛門直由が、安永二年（一七七三）に江戸に出て、日本橋茅場町に道場を開いた。その門人で養子桃井春蔵直一が継いで、道場を南八丁堀大富町アサリ河岸（新富町一丁目八）に移転した。この直一は、試合で片目になった。三代桃井春蔵直雄。嘉永五年死んだ。



承応2年（1653）承応江戸図（部分）

土佐藩と深い因縁

○：四代春蔵直正は養子で、直雄に見込まれたのか、天保十二年十七才のとき、沼津城主水野出羽守の家臣田中十郎左衛門の二男。二十四才で皆伝。斎藤・千葉と並び称せられたのは三代目春蔵。この桃井道場は土佐藩と因縁が深かった。土佐藩邸は鍛冶橋内（いまの都庁）にあり、築地には下屋敷（いまの中央区役所）があった。いずれも桃井道場から近かった。とくに下屋敷から目と鼻の先だった。このため藩の上士の師範麻田勘七は、桃井直雄の門下になった。このことから、のちに土佐勤皇党の中心人物となった武市半平太も入門し、塾頭になったのだ。

後年、人斬りで幕末史に登場する岡田以蔵も桃井門下だった。春蔵門下の勤皇派として活躍したものに、伊藤竜太郎と藤井織之助がいる。伊藤は丹波の農家の出で、一時は水戸

弘道館の師範となったが、平野国臣の生野の挙兵に加わり、捕えられ京都で斬られた。

○：藤井は大和十津川の郷士で、越後戦争のとき官軍側になり、河井継之助の指揮する長岡城を攻め、銃弾に負傷して自刃した。

四代目直正は弘化二年、幕府の講武所の教授となった。慶応三年大坂に出張、廃藩ごろまで天満で道場を開いた。明治十八年、この春蔵もコレラで死んだ。この直正の養子桃井左右八郎は宇和島藩士春田氏の子。奥羽戦争で戦死した。

補遺二　長谷川平蔵の拝領屋敷

湊町の松平阿波守邸は九八七八坪とほとんど一万坪に近い広さを持つ大邸であったが、明和元年十月、隣接する長谷川平蔵拝領屋敷四七九坪がこの阿波藩邸に加えられた。捕物帳で名高く私達に馴染の深い、火附盗賊改役の長谷川平蔵の屋敷が、たとえ、ほんの僅かの期間にしろ、現在の湊町にあったということは、たいそう私達の興味をそそる。これは冗談でなく、「江戸藩邸沿革」に、次のように記してある。

相対替屋敷書抜、明和元年十月十七日長谷川平蔵拝領屋敷湊町四百七拾九坪松平阿波守ぇ、桑島元太郎拝領屋敷南本所三之橋通十弐百三拾八坪余長谷川平蔵ぇ、松平阿波守目黒白金下屋敷之内五百坪桑島元太郎ぇ、三方相対替。（東京市史稿、市街篇四九―四三二頁）

この記録によって、長谷川平蔵が南本所三の橋の桑島元太郎屋敷跡地へ移った年が、明和元年十月であること、それと同時にその屋敷地の坪数が、一二三八坪もあったことの知られるのも私にとって甚だ興味深い。なお、明和元年に阿波藩邸に囲込まれた四七九坪の地所は、寛政三年一二月二九日には松平縫殿助に割替えになっている。

補遺三　冠山侯の逸事

前号で池田冠山侯の邸地のこと、露姫のことなどを記したところ、別所光一氏（江戸川区文化財調査員）から長文のお手紙に接した。氏は池田冠山は、私には非常になつかしい人物です。と前置をされて次のような意外の事実を報ぜられた。

（冠山侯には）―前述の「むとせの夢」とは別に、かれの多くの側室に生ませた小供十数名を病気で失っており、その供養のため、親しく江戸中の千ヶ寺の観音を拝し、納札し、かつ千首の歌を詠じたものを、かつて市島春城氏の『春城代酔録』で読んだことがあり、これは、のち早大図書館にいってわかりましたが、冠山の自筆本で『江戸府辺観音千個寺巡礼記』と覚えています。前記、弘福寺の冠山墓碑（佐藤一斎撰文）の墓碑には、多くの著書を挙げていながら、これは刻されていないようです。」

と。そこで、さっそく書庫から『春城代酔録』（昭和八年刊）を取り出して一読した。

市島春城翁は、冠山侯自筆の前記「千個寺巡礼記」二冊を入手されて、簡単に紹介の筆を執られたのであった。巡礼発願の原因は、だいたい別所氏の報ぜられたごとくであったが、別府氏の手紙に書かれなかった部分に、次のような記述がある。

この心願は文化五年の睦月に始まり十三年丙子の神無月に至り、八ヶ年を費して漸く参拝千寺に満ちたので浅草寺の僧を招き、満願の回向を営んだとあるが、交道の不便であった当時、勉めたりと云ふべきである。冠山に最も懇親であった佐藤一斎は長文の墓碑を書いてゐるが、其中に冠山が当時佞仏の評判があったと云うてゐる。多分八年間の此の参拝がかかる評判を立てたのであらう。

全体冠山には正室がなく九男十六女皆側出である。随分多産の人であったと見える。

第22　南八町堀

慶長八年に豊島洲崎の大埋立工事が行われ、町割もほぼ終った時点で、江戸湊の船着場の整備が行われ、慶長一七年（一六一二）には、八丁堀や三十間堀が掘鑿されたと記録されている。

寛永頃の八丁堀舟入の南側の川添い町の南八丁堀は、真福寺橋の辺から東方に突出した棒状の町地で、武家屋敷とては、北に本多下総、二・三丁目の南に丹羽五郎左衛門と松平宮内と、わずかに三軒の蔵屋敷があるのみであった。

承応二年版『武州古改江戸之図』で見ると、この頃には本湊町辺の埋立が進んで、前記南八丁堀の町端から南方に、二・三町の長さの町地が延びて「てつぽうず」と記されている。

南八丁堀という町は、一丁目から五丁目まであったが、享保六年正月の火事でこの辺一帯が類焼した後、三月には、一丁目から五丁目までの町地全部と、町地続きの大名屋敷の敷地をも大幅に公収して「火除広場」が設けられた。

この時立退かされた町屋の代地は、本八丁堀の武家屋敷上地内に与えられた。その年八月にはまた幕府の方針が変って、南八丁堀町屋立跡と、火除広

場の内に、町屋代地を付与したので、五繩の町地と蔵地ができた。この際四丁目は小町なので丁名を立てず、代地を一丁目から五丁目までの内に籠めてしまったので、南八丁堀四丁目の名称は、公簿から消えることになってしまった。

しかして、享保二〇年四月には、町裏の火除広場に六纏の「上納町屋」が設けられた。

○

鉄砲洲・南八丁堀・本湊町地区の水道は、玉川上水の分水が用いられていた。この地区の上水樋桝の完成した時期は明らかでないが、この地区に「武家上水組合年番」が組織されたのは、享保二〇年七月のことであった。

築地分水を利用する河岸通組合は、九組組合、三組組合、築地大通組合、築地両掛り組合、築地中通組合、築地小組合、鉄砲洲組合、丸屋町組合、九組枝組などの組合に分れ、各組合がそれぞれ上水桝の普請修復費用を分担していた。

九組組合というのは、芝口新橋際桝から、汐留川中潜樋を通り、同所の大桝から木挽町七丁目河岸へ出、同五丁目辻桝までの範囲に給水されており、この九組組合の先が三組組合の分担区域になるのである。水道管布設の道筋は次のごとくであった。

三組組合　是は木挽町五丁目辻桝より同四丁目通、壱丁目松村町折廻し伊達若狭守屋敷横手本多下総守屋敷前、夫より南八町堀壱丁目河岸通、同丁五丁目稲荷橋際埋桝より、鉄砲洲本湊町より船松町え渡る、橋下川中潜樋より、船松町壱丁目弐丁目・拾軒町・明石町迄。壱筋は脇坂中務大輔屋敷前迄樋筋。

というのであって、この範囲が「組合定請場」であった。当時の水道管埋設個所を、この記録でたどることができる。

○南八丁堀の聞人

〝郷土室だより〟第29号の「新富町・入舟町」の項下に、桃井道場について「堀長門守」の邸地のことを記したが、「藩邸沿革」にはその邸地を「上屋敷、南八丁堀」と記していた。藩名は「須坂藩」である。須坂藩は、長野県高井郡須坂、江戸から五八里、長野の東方に位置する。

現在の町名では、銀座一丁目である相引橋西方の伊達家「吉田藩（愛媛県最西部宇和島に近い）」の屋敷も、同家の記録には「南八丁堀」と記してある。江戸時代、武家地には町名はなかったので、最寄りの町名を取って住居表示に用いたから「南八丁堀」と称する地域は、今日よりはるかに広範囲にわたっていたわけである。

『江戸当時諸家人名録』を飜閲していて気がついたことであるが、南八丁堀居住とする聞人の註記には、すべて吉田藩、須坂藩、阿州藩と記されている。吉田藩と注するのは本間遊清一人であるが、須坂藩と記すものは四人、阿州藩と記すものは六人を算する。この註記は、それらの人物が注記する藩邸内に居住していることを示すものと思われる。

それらの人々の姓名を拾ってみると

（文化一二年版人名録）

和歌　遊清（ママ）号九江、吉田藩　本間　遊清
画　文方一号雲梯、須坂藩　海沼鋼之助
画　翠岳名重起、字寿考会日五十、須坂藩　関三郎兵衛

「江戸文人寿命附」より

（天保一三年版人名録）

画　翠山名清、字清水須坂藩　山岸　妙吉
和歌　三峰名辰政、字有恒一号杜谷舎、須坂藩　丸山　舎人

（文久文雅人名録）文久三年版

画　林松斎名素幽、字子遠阿州藩　伊藤雄之進
画　林谷名盛信、字雲□阿州藩　宮内与三郎
詩書　梅甫号借竹居、阿州藩　増田孝之助
詩　独嘯名　、字子敏阿州藩　高　鋭一
書　月村名武、字千城一号渭月村舎　伊月平一郎
詩書　隻梧名成龍、字雲洞号借月居、阿州藩　増田道太郎
書　□谷名政和、号愛松軒阿州藩　宮崎実右衛門

などといった人達を拾い出すことができる。八丁堀の阿波藩邸に、かくも多くの聞人が住んでいたことで思いつくのは、浮世絵師東洲斎写楽の八丁堀居住説である。昭和四七年東出版刊行の『写楽新研究』に載る「浮世絵類考参考年表」によると、その説は、文政初期の式亭三馬の補記に

三馬按、写楽号東周（ママ）斎江戸八丁堀ニ住ス、僅ニ半年行ハルルノミ

とあるのが初見だそうで、その後二〇数年経って天保一五年に加えられた斎藤月岑の補記に、

写楽　天明寛政年中の人、俗称斎藤十郎兵衛、居江戸八丁堀に住す。阿波侯の能役者也……

を追記されているという。

三馬の説を重しと見るか、月岑の追記を重視するかで説が分れるわけであ

るが、まだ決定的な資料が現れぬ。

閑話休題。幕末文久二年に畑銀鶏が刊行した『現存雷名江戸文人寿命附』というおもしろい本には、南八丁堀居住の聞人として、海沼文方、関翠岳、本間游清、雙鷺菴雨谷をあげ、海沼文方には

評判もづんとよしのの桜花みごとにかける君が筆さき

大極上々吉寿九百年

関翠岳には

深川の画風をよくものみ込し社中のうちのこれぞ一人

大極上々吉寿九百年

本間游清には

よみ哥の外に過れし韻学はしる人ぞしる是ぞたふとし

大極上々吉寿千年

雙鷺菴雨谷には

誹諧に美名かがやく雙鷺菴人づきのする君が句の体

極上々吉寿六百五十年

などという讃を書きつけている。

もっとも、同じ畑銀鶏の著作『書画薈粋』第二編には、海沼文方を、海沼友平の名で取上げ、住所を麹町貝塚とし、名貞、字水石、号文方又梅隠居士「江戸ノ人、始文晁翁ノ門ニ学ブ、後明清ノ画風ヲシタヒテ独立ス。又詩作を好ミ高吟数首アリ。云々」と記しているから、安政六年（一八五九）の頃には麹町貝塚に居を移していたのかも知れぬ。以上何人かの人々の内、今なおその名の伝えられているのは、本間游清くらいのものであろうか。吉田藩医であった游清は、たぶん吉田藩邸に起居を許されていたものと思う。

この人については書くべきことが多いが、木挽町地区の伊達家のことを書く時に記すとして、ここではこれ以上深入りすることを避けておく。

「書画薈粋二編」より

○南八丁堀地区の諸問屋

八丁堀の左岸右岸に発達した南北八丁堀の町々には、薪炭問屋が集中して栄えた。本八丁堀のことは、北八丁堀地区に筆がおよんだら記すこととして今ここでは、幕末嘉永のころ、南八丁堀に存在した諸問屋の名前を掲げ、ついで本湊町、船松町一・二丁目、十軒町の商況におよぶこととしよう。

1 南八丁堀 一丁目

水油仲買 一丁目家持 相模屋七五郎

人宿二番組 〃 藤左ヱ門店 丹波屋伝右衛門

春米屋七番組 一丁目 阿波屋吉兵衛

〃 〃 中川屋善右ヱ門

〃 〃 越前屋 喜助

〃 〃 明石屋次郎吉

炭薪仲買 〃 （富）大留町卯三郎店 松屋 由蔵

〃 一丁目新八店 阿波屋治兵衛

〃 〃家主 伊豆屋 藤吉

〃 〃新七店 桐屋 勝五郎

〃 〃与八店 伊豆屋 伊助

2 同 二丁目

荒物問屋 住吉組二丁目惣兵衛地借 都賀屋三郎兵衛

春米屋七番組 〃 三河屋 伊助

〃 〃 三河屋平右衛門

〃 〃 伊勢屋市兵衛

竹木炭薪 川辺二十六番組 〃 川喜田屋半右衛門

炭薪仲買七番組 〃 藤吉店 東屋 市兵衛

〃 〃又十郎店角屋 弥吉

〃 〃又十郎店三河屋 新蔵

〃 〃又十郎店尾張屋 新助

炭薪仲買七番組 〃 重蔵店 中村屋与兵衛

3 同 三丁目

春米屋七番組 三丁目家主三河屋 藤蔵

竹木炭薪 川辺一番組 〃 伊賀屋 元蔵

〃 川辺三十八番組 〃 家主川越屋惣右衛門

炭薪仲買七番組 〃 金蔵店 加賀屋喜兵衛

〃 〃 阿波屋 金蔵

〃 〃藤兵衛地借 豊川屋左兵衛

4 同 五丁目

地廻米穀問屋 五十六番組 五丁目 溜屋 新五郎

春米屋七番組 〃 大坂屋喜兵衛

〃 〃 〃 高田屋 富八

竹木炭薪 川辺一番組 〃 〃 竹屋八三兵衛

〃 川辺二十六番組 〃 紙屋 藤兵衛

炭薪仲買七番組 〃 弥市店 浜田屋吉兵衛

〃 〃 〃弥市店 鈴木屋 兼吉

〃 〃 〃仁三郎店三河屋仁兵衛

〃 〃 〃大助店 伊勢屋久次郎

〃 〃 〃〃 中村屋 藤吉

なお、文化十年版『十組問屋便覧』に載る南八丁堀の問屋には次の諸店がある。

竹皮問屋 二丁メ 田中屋 甚太郎

鍋釜問屋 〃 釘屋 源右衛門

〃 〃 松井屋 六兵衛

絵具染草 〃 田中屋 甚太郎

明樽問屋 〃 かづさや 弥助

『東京買物独案内』（明治二三年刊）に

御菓子調進所 二丁目 金沢丹後惣本店